時評

超結社団体の意義と歌人の在り方

高山邦男

歌人と呼べる人はどんな人かという問いには色々な意見がありそうだが、歌人という職業は無いので、取り敢えず作歌している人たちを歌人と呼んでいいのではないかと私は考えているのだが、どうだろう。つまり、価値観については有名歌人とか認められている歌人とか本当の歌人とか、または無名歌人とか、そういう修飾語を付加していけば表せるのでいいと思うのである。

何故、こんな話をしているかと言えば、短歌界には現代歌人協会という超結社団体があり、この協会に入会を許されると何となく歌人として認められたような気分になったりする。何故そうなるかと言えば、この団体は職能団体という位置づけを持っているからだ。ホームページにも「１９５６年に結成された歌人の職能団体です。」という記載があり、会員になるには「現会員２名以上の推薦により、理事会の選考を経て、総会の承認を得る必要があります。」とあり、入会を希望すれば誰でも入会できるというシステムではない。歌人という職業は無いが、日本の文化、文芸の中で短歌は重要なパーツであり大きな役割を担っている方々は大切な職能歌人であることは言うまでもない。一方、日本歌人クラブという団体は、「歌人相互の親睦を計り、歌壇の発展に寄与することを目的とした、日本で最も大きな歌人の団体」と説明されていて、親睦団体という意味合いが強い。入会に関しても「短歌を作り、短歌を愛する方はどなたでも入会できます。」とあり、私の考える歌人の定義に添っているように思う。

職能団体と親睦団体はそれぞれ意義が違うが、実際は両方入会している人も多いし、活動内容も双方短歌に関わることなので相容れないことをしている訳ではない。歌人の団体なので「歌壇の発展に寄与」「会員相互の生活を守り、協力によりその向上発展を期する」ことに異論はないはずである。例えば、この両団体は２０１９年５月１０日に「高校新学習指導要領・大学入学共通テストについての声明」、令和２年１０月２６日に「日本学術会議の新会員任命拒否に反対する声明」を共同で発している。短歌という一つのジャンルでその存在を守り社会的意義を発し発展させていくために超結社団体は歌人にとって必要な組織なのである。

これに関連して、戦前、大日本歌人協会解散事件という軍部による弾圧があった。三枝昂之はこの件について『昭和短歌の精神史』で「昭和史を振り返ったとき、短歌史は俳句史より不可解な暗さを持っている。（中略）権力を後ろ盾にした歌人の恫喝によって歌人団体が解散させられるという異様。当事者が事後の説明責任を果たさず、ブラックボックス化したままである異様。」と振り返っている。歌人はこうした歴史を忘れてはならないのだ。

佐佐木信綱は『佐佐木信綱作歌八十二年』の序で父弘綱の座右の銘であった「斯道（しどう）を弘布（ぐふ）する」ことを自分も良いと信じ、生涯にわたり務めてきたと記している。信綱のこうした信念は超結社団体の在り方に通じるものである。歌を作る人は短歌と関わっているという意味でおおよそ仲間だと私は思っていて、短歌人口が減りつつある今、歌道を発展させようという志を皆で共有すればより良いそして楽しい短歌界になっていくと私は信じている。